

立つ 毅然と立つ

2024年・1月おはなしかご

毅然・・・揺るぎのない強い意志で向かってゆくこと

心の中に、生涯消えない立ち方をした存在がいる。

・・・フランダースの犬（原作）の中のパトラッシュ（犬）だ。

犬は生まれてまもなく、重い荷車を引く人生を強いられた。犬の人生には自分を罵^{ののし}る飼い主の怒鳴り声と体に振り下ろされる鞭^{むち}の痛さしかなかった。

やがて動けなくなると、ゴミの様に道ばたに捨てられた。

ダースじいさんがその犬を見つけた時は、もう死んでいると言っても良い状態だった。

そんな犬をダースじいさんは自分の小屋に運び、介抱したが、犬は目をあけることも、体を動かすこともなかった。・・・小屋のすみで、死のすぐそばで、じーとうずくまっていた。

だが、そんな状態の犬にすら、不思議に思えたのはここへ来てからというもの怒鳴り声も、乱暴な言葉も聞こえてはこなかったことだ。耳にするのは、老人の穏やかな言葉と、男の子のかわいらしい声だけだった。そしてムチで打たれることも、蹴^け飛ばされることも、なかったことだ。

体にふれるものは、なでるようにさする、老人のやさしい手のぬくもりだけだった。

犬は・・・まっ暗な死の闇の中で、わずかな一滴の水を求めるかのように、ただひたすらその声を聞いていた。

それからどのくらい経った頃だろうか？・・・犬はうっすらと目を開けた。・・・

すると、すぐにそれに気づき、そばにきて体に抱きついたのは、小さな男の子だった。

男の子の体はやわらかく、暖かだった。犬は今までこんな風に抱きしめられたことは一度もなかった。

男の子のぬくもりに包まれたその時・・・犬の心の奥にかすかだが、もうすこし生きていたいという気持ちが芽生えた。・・・犬は水を飲み始めた。そして食べ物を食べ始めた。・・・

犬は生きようとしはじめたのだ。・・・そして、やがてその頑丈な4本の足で再び立ち上がったのだ。

もうほとんど死んでいるといってもよい体を、心が生きる方へ向かわせてゆく・・・その凄^{すご}さに奮^{ふる}えた。

★「唄を忘れたカナリア」という童謡がある。

♪唄をわすれたカナリアは・・・柳の鞭で打ちましょか・・・裏のお山に捨てましょか♪・・・

背戸の藪に埋めましょか・・・♪

役に立たなくなり、存在の価値を失くした者は、責めて、責めて苦しめましょか・・・という恐ろしい歌詞だ。だが、その後に「いえいえ、それはなりませぬ」と言う言葉がでてくる。そして最後は

「唄を忘れたカナリアは、象牙^{ぞうげ}の舟^{ふね}に銀の櫂^{かい}、月夜の海に浮かべれば、忘れた唄を思い出す♪」となるのだ。苦しい心は大きな心の舟に乗せて、やさしく、美しい思いで包むのだ。そうすれば必ず心は再び立ち上がる。そうなのだ！パトラッシュにとってダースじいさんは「象牙の舟」だったのだ。

「生きることとは、矛盾^{むじゆん}と混迷^{こんめい}の中で必死にもがき、やがて絶望の淵に立った時、叫び声を上げる事だ」という激しい言葉があるが、苦しみもがき、もう先に進めない、と思ったその時、心の奥底から、もう一度、自分を立ち上がらせる声が聞こえてくるか、否か、が人生の幸不幸を分けるのだろう。

津守房江さんは、実にわかりやすく、そのことを日常のできごとで伝えてくれている。

「子どもが持ち帰る宿題・テストの直し・そしてそのことへの反省文は毎日の様に続いていた。

そのせいか、だんだんそれが「次はしっかりと頑張ります」と言う同じ言葉になっていった。

こう書いておけば無事（事なき）であると思っている様で、これはこの子の本当の気持ちではないと感じていたが・・・しばらく様子を見守ることにした。

そしてそれからどのくらい経った頃だろうか・・・ある晩、いつものように反省文を書いていたのだからその時、突然「もういや～ もうこんなこと絶対にいや～」と言って大声で泣き出したのだ。

その声は、長い間、抑え込んでいた何かを跳ね飛ばすほどの激しい声だった。

自分の気持ちと、外側との矛盾に苦しみ、どうすれば良いのか混迷の中を必死に生き、限界に立たされた時、堰を切ったように自分の気持ちが、叫び声になってこみ上げてきたのだ。

そして長い間泣き続けていた。・・・私は泣いているその子の背中をさすりながら、この涙は短いが苦しかった時の中を生き抜いた誇りある涙だと思った。そして同時に私自身がこの日まで見守るという気持ちを持ちこたえられたことにも、胸がいっぱいになった。」

心は、いつも猛然と立ち上がる時ばかりではない。日常という日々の中でゆっくりと静かに、だが確かに立ち上がる事がある。大人も子どもも、どうすれば良いかわからない混迷の中で日々苦しみ、諦め、という絶望の淵に立たされる事は少なくはない。

そんな時、そばにいてくれる人の心に象牙の舟があれば、その心は、必ず、再び立ち上がれるのだ。

だが、象牙の舟は最初からあるのではない。懸命に生きてゆく人の心を見つめ、同行し見守る・・・という道を歩けた時、その人の心の中に、象牙の舟が作られてゆくのだろう。

西 条八十氏は 知識階級の文豪達から、作る歌を批判され「墮落者」と誹られた。

そして深い悲しみの淵に落ちてゆく。そんなある日、関東大震災による被災者の人々にハーモニカで自分の歌を届けた。その時、彼は苦しい人々の心とその歌でどれほど癒やされていったかを感じた。

そして自分の音楽の真価をはっきりと知ったのだ。・・・彼は再び立ち上がった。

そして猛烈に歌を作りはじめ・・・やがて「カナリアの唄」が生まれた。

近年、数え切れない程の NPO や、企業や新しい生き方が立ち上がっている。

衣食住・カルチャー・メンタル・・・実に様々な分野での立ち上がりだ。

同種も多く、全国の都道府県すべてに共立するものもあるほどだ。

それらの活動や企業に関わる大人達の心に「象牙の舟」があることを願う。

そして扉を開けて訪れる人々の心を「銀の櫂で美しい月夜の海へ」と連れていってくれることを心より願う。

今、世界の人口は 80 億を超えた。日本の人口は 1 億 2 3 3 0 万人だ。

その中で心に「象牙の舟」を持っている大人はどのくらい、いるのだろうか？

子どもの心を美しく、心楽しい月夜の海に、連れてゆける大人は何人いるのだろうか？

きらきらした目で「おはなしして！」とまっすぐに大人を見上げる子どもの心に、銀の櫂のような声で美しい、月夜の海のようなお話を届けてあげられる大人は、何人いるのだろうか？

電車やバスに乗り「この中に子ども達に楽しいお話を聞かせてあげられる人はおりますか～～」と聞いた時「歌は歌えます」と言う人はいるかもしれないが「楽しいお話を聞かせてあげられます」と言う人は多分いないだろう。

「お～い～～ お話の象牙の舟の船頭さん～ どこにいますか～」

何年も何年も前に、小さな小さな足で、両手にほんの少しの「お話」を握りしめて立ち上がった者がいる。たった一人で立ち上がった者がいる。小さな象牙の舟を漕ぎ、社会という海に出た船頭がいる。その日から40年の年月が経った。・・・そして今、その舟は大きな象牙の舟となった！数え切れない程の楽しいお話を積んで全国に届けている！全国に舟の汽笛を発信している！
実に多彩なオンラインの海路を走っている！

子ども達はむろんのこと、大人にも・・・そして大人の知的障害の方々のところにも舟は行っている。はじめは、誰が何をしに來たのか、と怒った様に後ろを向きこっちを向いてくれない。顔を上げてくれない。その様子に戸惑う職員の人達・・・だった。だが、ひとつき経ち、ふた月経ち、み月と経つうちに彼等はいつのまにか顔を上げ、様々な姿で喜びを現し、気がつくと一緒に「象牙の舟」に乗ってくれていたのだ！舟に乗っているのは「お話」だけではない。「手あそび・人形あそび・ハンカチあそび・お手玉あそび・言葉あそび・体あそび・」 実に様々な楽しい！世界がある！喜びがある！
今では職員の方も大きな声で、実に楽しそうに言葉遊びを唄っている！体遊びを踊っている。そして「ず〜と、ず〜と来て下さい！ず〜とず〜と」ときらきらした目でまっすぐに見つめて言っている。

保育園の玄関に、自治体の広報誌に、母子手帳に QR コードが貼ってある。そして送り迎えの時、検診の時スマホでタッチすると、子守歌が聞こえてくる。優しい声でゆったりと、歌っている声が聞こえてくる。それを聞いているうちに、親達の心が何ともふんわりと温かいものに包まれて、そして気がつく、いつのまにか、我が子を抱いて子守歌を唄っているのだ。子守歌だけではない。「手遊び！お話・言葉あそび」と続く。気が付くと日本中に子守歌や、お話しが響き渡っている。電車やバスの中で「お話を届けられる人！子守歌歌っている人〜」と聞くと「はい！」と言う何人もの声が聞こえる！

「おうちであそぼ！」の海路(オンラインコース)ができたのだ！

発達支援のお子さんの家族の方がユーチューブでその様子を伝えてくれている。その中のひとりの方が「専門の方の療育だけでなく私達が家でできる事はないのだろうか？」と言っていた。

あります！あります！「おはなしかごの象牙の舟は・ドラエモン号・」なのです。

こんなこといいな！できたらいいな！→「できます！」

こんなものいいな！あったらいいな！」→「あります！」

子どもの心も大人の心も喜ぶ何もかもがあるドラエモン号です！

「一対一の手遊び！人形あそび！言葉遊び！絵話！」親子の心の海に「楽しい象牙の舟」が走る！本当だ！「発達支援施設の保育士」の方々も歓声を上げて喜んでいる。
今までは絵本を読むことしか届けられなかったのだが「園全体でのチームレッスンコース」を受講し、そこで出会った楽しい世界を届けた時の子ども達の喜び様や、変化に驚き、胸を熱くしている。子ども達が喜び！歓喜している映像を送ってきてくれている。発達障害とは？支援とは？この不可思議な世界の扉が大きく開き、月夜の海にゆけた時、今までの療育ではゆけなかった美しく、深い海にゆけるのだ！

2024 年中に「発達支援の世界への海路・オンライン発信」が完成する。

矛盾と混迷である発達障害という世界が、その名も、内実も

大きく変わる可能性が今、生まれかかっている。心より楽しみに待っていてほしい！

「お話の象牙の舟」も今では何隻も増えた！「チームおはなしかご」のメンバー達！オンライン海路で学び「小さな劇場マン」のディプロマを（船頭さんの資格）を獲得した保育園！ 保育士達！・・・

そんな中のひとり・・・Mさんの立ち上がりが凄い！ かつて、自らが鬱^{うつ}の病を患った時、精神科の医師から「何か楽しい事をやると良いね」と言われて「楽しいこと?」と考えながらインターネットの世界をさまよっていた時「おはなしかご」の扉を開けていたそう。あれはまさに神の手が握っていたマウスを動かしその扉をクリックしたのだと言う。その頃はオンラインなどなかったので、すぐに「おはなしかご」を訪ねた。Mさんの心を立ち上がらせたのは「象牙の船の船頭」こと、おはなしかごのリーダーの言葉だった。

「心と言葉はひとつだ。暖かな心が話をするときあたり一面やさしい風が吹き、美しい花びらが舞う。世の中の大人の心が、みんなそうになったら子供達はどんなに幸せになるだろう」と言ったのだ。「どうしたらそうなれるのか?」と必死の思いで聞くと

「なんていい話だろう！と心が喜ぶ話を自分の心に、沢山聞かせてあげることだ」と言った。それから夢中で「おはなしかご」に通った。今では「おはなしかご言葉の喫茶ルーム・ポットキャスト」というYouTubeから毎月「聞いて良かったいい話」が聞こえてくるが、その頃は「おはなしかご」へゆかなければ「いい話」は聞けなかった。開校していた「言葉の魔法使いの学校」にも入学した

そして今、Mさんは象牙の船に「楽しい！嬉しい！美しい！いい話」を沢山乗せて子供達に届けている。その「三つのしい！」は子供達の心に抱えきれないほどある「淋しい・悲しい・苦しい」を消してくれるのだ。そして生きる力と希望に変えてくれるのだ。一人ではどうすることもできない、小さな弱者の子供の心を、再び立ち上がらせてくれるのだ！

自治体からの派遣の場にもゆくのだが、彼女の届けるのは他の人達が届ける「個人読みの絵本」ではない。そのことから、Mさんを・との指名の声が上がりはじめた。すると自治体は指名を禁止した。それでも特に支援の場からは何としてもMさんを！の声が大きく、今では自治体の発達支援センターは彼女が一人で担当している。やがて重度の子供達の場からもぜひ！との声が届き「重症心身障害児施設等デイサービス」の場にも届けている。握力がない子がわずかな力で握れるようなペープサートを作り、視覚が弱い子にはすぐそばで見られるパネルを作り・・・柔かいお手玉を、ハンカチを、音楽をと沢山の楽しいを運んでいる！

まさに「ブギウギ」だ！象牙の船が「ブギウギ船」になったのだ！

そうなのだ！Mさんは前人未踏^{ぜんじんみとう}の地に立ったのだ。未踏とは今まで誰もその場所に行ったことがない所だ。今、Mさんがそこで流している汗はやがて、その地を誰もがウキウキとゆける地にすることだろう！

野口雨情^{のぐちうじょう}氏が、生まれてまもないわが子を亡くした時「しゃんぼん玉消えた。飛ばずに消えた」という歌を作った。そして悲しい風は吹いてほしくないと「風、風 吹くな」と歌った。そう、決して吹かせてはいけない風がある。

その風の前に、両手を広げて立つのだ。毅然と立つのだ。

だが、吹かせたい風がある。「楽しい風・嬉しい風・美しい風」を世界中の子供達の心に吹かせたい！津守房江さんは言う「障害と言われる子供達と生きる時、私達は障害を治す事はできないかもしれない。だが幸せなひと時を共に生きることにはできる。そのひとときをシャボン玉をふくらませるようにそ〜と楽しく！生きたい」・・・一人でも多くの「象牙の船の船頭さん」が増えてくれることを願って、

今年も立つ！毅然と立つ！楽しく立つ！美しく立つ！前人未踏の地に立つ！

